

エキブ・ド・シネマの再興

ー 文化施設としての映画館の構築 ー

Keywords

ミニシアター シネマコンプレックス 文化
エキブ・ド・シネマ 岩波ホール



DZ20153 林田 拓門

1. はじめに

映画は、大衆娯楽として爆発的に人気になった。しかし、テレビの普及やアマゾンプライムビデオやNetflixなどのサブスクリプションサービスの普及によって客足は急速に減っていった。さらに、2000年代に入り、大規模な映画館であるシネマコンプレックスが急速に広まった。そんななか、ミニシアターに求められるものは何なのだろうか。

2. 研究背景

2.1 ミニシアターの文化的価値

ミニシアターは芸術表現の場として重要な施設である。小規模な劇場や映画館は、実験的で挑戦的な作品やアーティストにとって理想的な場所であり、彼らの芸術を表現するための貴重なステージとなっている。こうした作品には、既成の観客の期待にとらわれず、革新的なアイデアや社会的な問題を取り上げるものが多くみられる。さらに、ミニシアターは文化的な多様性を促進する役割も果たしている。大規模な商業劇場や映画館ではなかなか見ることができないような、マイナーなジャンルや地域の作品を上映することで、多様な視点や文化を体験する機会を提供している。これによって、観客は新しい視点や文化に触れることができ、自身の視野を広げることができる。また、ミニシアターは地域コミュニティの絆を深める場でもある。小さな劇場や映画館は、地域の人々にとって親しみやすい場所であり、観客同士やアーティストとの交流が活発に行われる。こうした場での出会いや交流は、地域の活性化や社会的なつながりを促進する一助となっている。それぞれのミニシアターには独自の魅力があり、多くの人々にとって愛される場所である。ミニシアターの文化的価値は、新しい芸術作品の生み出しや、観客の教育やエンターテインメントへのアクセスを拡大することによって、より一層高められていくと言える。



図1 2022年の日本における上映作品数

2.2 映画館に対する支援制度

欧米などの映画先進国では、映画館を文化施設として扱い、映画産業と映画文化を統括し振興する組織があり、製作・配給・興行・教育・保存に至るまで、映画に関わるあらゆることに関与している。それに対し日本では、映画館を娯楽施設として扱い、ほとんど公的な支援を受けていない。運営形態に関しても、欧米では公的な組織が運営することが多いのに対し、日本では民営の会社や個人での運営がほとんどであるため、利益優先の興行館としての運営となってしまう。

2.3 岩波ホールの歴史・活動

(1) 岩波ホールの歴史

岩波ホールは、1968年に岩波書店の創業者・岩波茂雄さんの息子である岩波雄二郎さんが千代田区から「文化的な施設をつくってほしい」と要望を受けたことがきっかけで、多目的ホールとして開業した。1974年にエキブ・ド・シネマ運動が開始され、これ以降は映画館として利用されている。それ以降、2022年7月29日に閉業するまで、54年間多くのファンに愛されてきた。¹

(2) エキブ・ド・シネマ

エキブ・ド・シネマとは、フランス語で「映画の仲間」という意味であり、「岩波ホールを根拠地に、世界の埋もれた名画を発掘・上映する運動」と定義されている。この運動では、4つの目標を掲げている。1つ目は「日本では上映されることの少ない、アジア・アフリカ・中南米などの欧米以外の国々の名作の紹介」、2つ目は「欧米の映画であっても、大手興行会社に取り上げない名作の紹介」、3つ目は「映画史上の名作であっても、何らかの理由で上映されなかったもの、カットされ不完全な形で上映されたものの上映」、4つ目は「日本映画の名作を世

に出す手伝い」である。1974年に1作目を上映して以降、66の国と地域の計274作品を上映した。²

3. 研究目的

日本では、全上映作品のうち、日本映画・外国映画ともに半数近くをミニシアターのみで上映している。しかし、公的な援助がないために個人運営が多いミニシアターがどんどん閉館している。そんななか、新型コロナウイルスの影響でミニシアターの草分け的存在であった岩波ホールでさえも閉館してしまった。岩波ホールの活動は日本の映画文化を守っていくために必要である。そんな岩波ホールの活動を再興するための設計を提案する。

4. 敷地

対象敷地：東京都千代田区神田神保町2丁目



図2 敷地図

4.1 特徴

日本の出版文化や知識の中心地であり、数多くの書店や古書店、大学、研究機関が集まる地域。また、喫茶店やカレー屋、楽器店など様々な一面を持つ。

4.2 街の成り立ち

江戸時代、神保町周辺に多くの学校が建てられたことがきっかけとなり、教科書を中心に本の需要が高まった。それに目を付けた岩波書店が神保町で最初の書店を開き、成功を収めたことで数多くの書店が誕生し、現在の古書店街を形成していった。また、書店が多く開かれたことで、本を読む場が必要となり、喫茶店も数多く誕生した。

5. 提案

5.1 文化の形成

文化とは「その土地に馴染み、生活の一部として浸透していくもの」と定義する。神保町の文化の形成の仕方として、街に「情報がにじみ出ている」ことがあげられる。



図3,4

5.2 コンセプト

街に開くことの意味は人に情報を伝えることにあると考える。しかし、映画館の特性上、街に開くというのに向いていない。そこで、人が移動する「道」を建築内に取り込み、そこに対して開くことで人に情報を伝えることを可能とし、神保町での生活の一部になることを期待する。

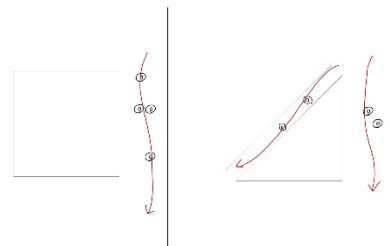


図5 ダイアグラム

5.4 プログラム

用途：映画館（ミニシアター）、書店、イベントホール

対象：神保町を訪れるすべての人

敷地面積：1000m²

6. おわりに

映画は教育的側面や道徳的側面を与えるだけでなく、他人の人生を追体験させてくれる媒体である。そのような体験をもたらしてくれる映画文化を後世に伝えていきたいと思う。

参考文献

図1：<http://www.eiren.org/toukei/data.html> をもとに作成

1)：

<https://www.city.chiyoda.lg.jp/koho/kuse/koho/pressrelease/r4/r408/20220801.html>

2)：『岩波ホールと〈映画の仲間〉』,高野悦子

エキブ・ド・シネマの再興 ～文化施設としての映画館を考える～

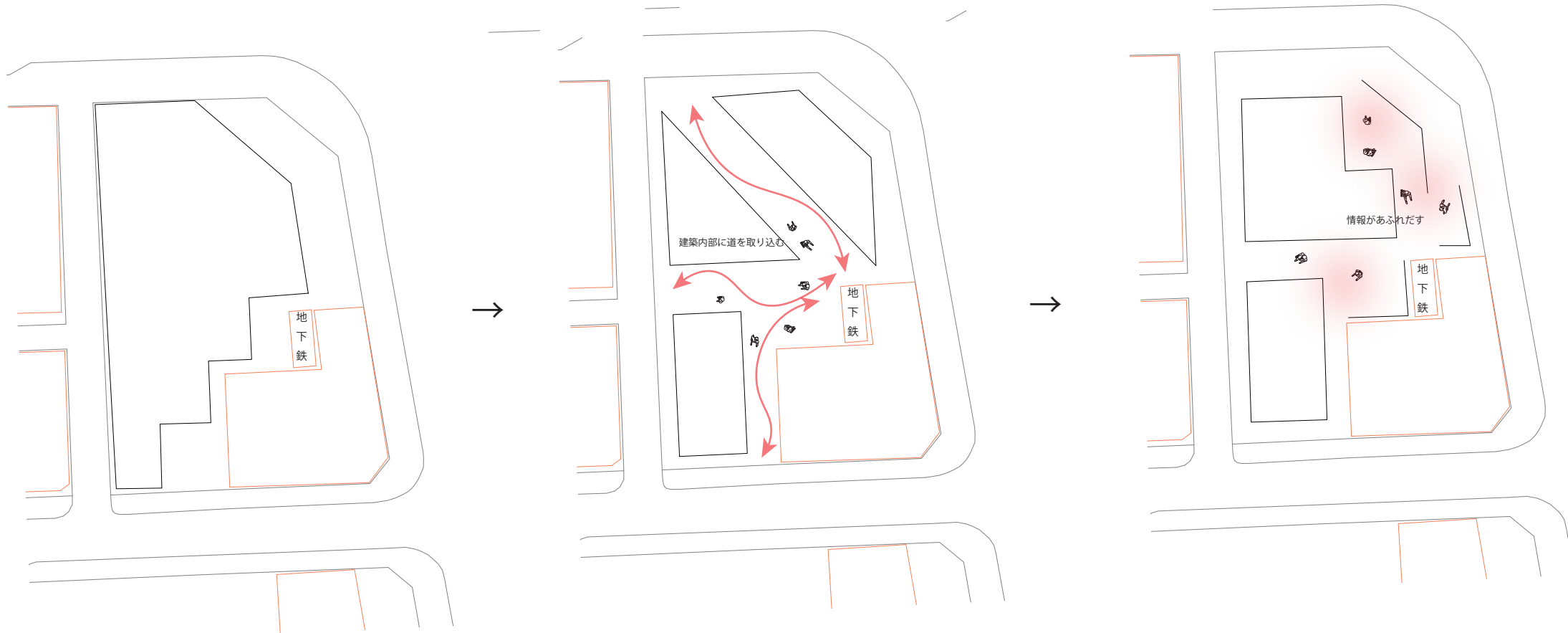
コンセプト

街に開くことの意味は人に情報を伝えることにあると考える。しかし、映画館の特性上、街に開くというのは向いていない。そこで、人が移動する「道」を建築内に取り込み、そこに対して開くことで人に情報を伝えることを可能とし、神保町での生活の一部になることを期待する。

プログラム

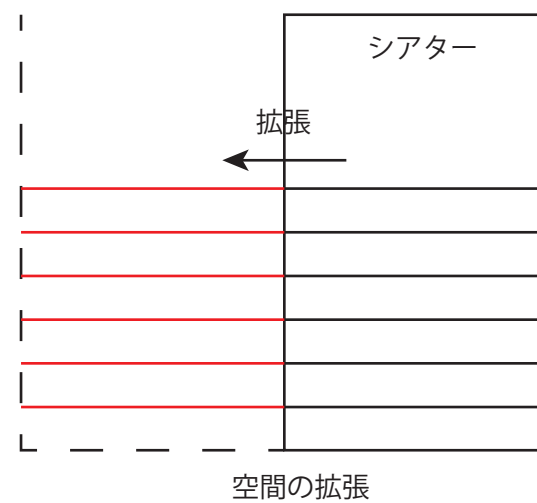
- ・ミニシアター
- ・展示館（上映中の映画だけではなく、紹介したい映画のポスターを多数取り扱う）
- ・書店（映画雑誌やポスターなどを取り扱う）
- ・イベントスペース（古書市場のような映画市場が開催される場）

平面ダイアグラム



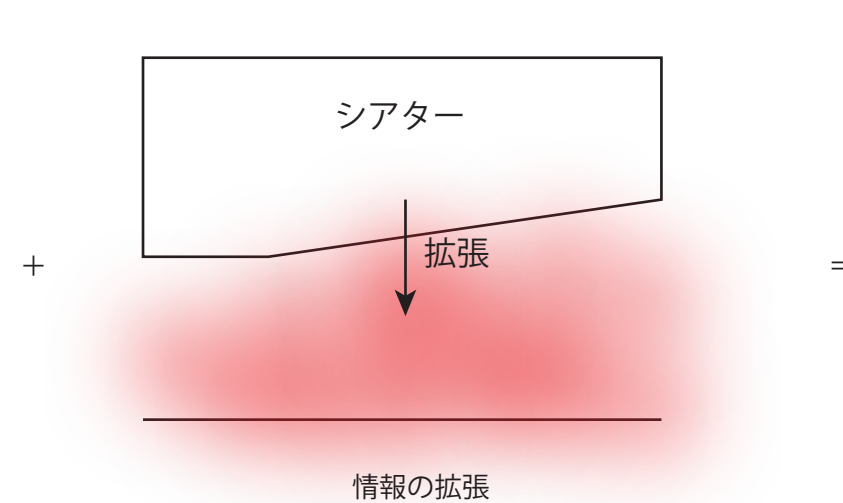
構成ダイアグラム

平面構成



シアターを中心に空間に多様性を生む

断面構成



シアターを中心に情報を拡散する

